Japanese Association of Educational Psychology

究者が……」のステートメントに対する発表者の解釈について質問した．特に，発表者が人見知りを否定的に把握している点を指摘して，人見知りは肯定的な意味も含むことを主張した．

237（野村）に対しては，測定法に関する質問がなされた．発表者は，従来の eye camera とこの研究の測定法との比較を述べ，幼児にとっては束縛の少ない本研究の測定法は，より有効であることを主張した．

240（飯島）に対し，結城（中京大）は，新奇性，親近性は，図形のもつ性質でもないし，提示回数の問題でもなく，主体の側の問題であるから，情報理論的観点からは把握できないと指摘した．発表者は，新奇性の指標として，主体の情報に対する認知的標準より規定する方向をとっているという説明を補足した．この質問は，240 に対するというよりむしろ，本分科会のアプローチに対する批判であり，研究者の問題意識のあり方を問う深い意義を含むが，そこまで討議が深められず，残念であった．その他，山口（学大）により，認知的標準に関する質問がなされた．

なお，238（毛塚）に関しては，2，3 歳の達成群，非達成群間の差などの細かい質問がなされた．239（稲垣）に対しては，仮説と結果との関連について質問がなされた．この二論文については，特に深く討論されなかったのは遺憾であった．

全体に field の好奇心が認知スタイルに置かれていた．時間不足のため，研究の今後の発展の方向まで言及できなかった．結城の指摘のように，問題の本質にかえって考察することの重要性も痛感された．

（野村庄吾・飯島婦佐子）

発　　達（241～248）

座長　馬　場　道　夫・柴　田　幸　一

241 思考中の脳波
大阪大学　柏　原　恵　龍

242 ОбчуеНИе（Verkehr）の発達に関する研究（1）
—その理論的枠組について—
姫路工業大学　青　木　冴　子

243 練習による行為の短縮について
東北大学　柴　田　幸　一

244 技能の習熟過程に関する研究
—製図技能における投影—構成行為を中心として（1）—
九州大学　城　仁　士

245 幼児における感覚活動から思考活動に移る因子ありや
—主として質問形態の言動における—
立教女学院短期大学　加　藤　常　吉

246 幼児の象徴機能の発達　—虚構的行為モデルの再現における手指の象徴的利用を中心に—
東京教育大学　河　崎　道　夫

247 就学前児の「みたて」の発達　—特にあそびとの関連で—
東北大学　辻　野　直　子

248 理解過程に関する基礎実験
茨城大学　馬　場　道　夫

I　討議の状況

発表内容は，思考・認識に関するものにほぼ統一されていたが，問題に対する接近法，被験者は極めて多様なものであった．しかも，発表者以外の分科会出席者は，数人という状況であった．それにもかかわらず，質疑・討論は活発であり，予定時間を十数分過ぎて終了した．

討議に当たって座長は，「① 思考過程をどのように捕えるのか．② 思考・認識の発達はどのようにして行われるのか．」という 2 つの観点を定めて，この観点から討論が行われるよう希望を表明しておいた．実際には，座長の意図は，必ずしも実現していなかったようであるが，この観点から発表内容に関する討議を整理して報告する．

II　討議の概要

思考過程をどのようにして捕えるかの問題に関係が深かったのは，柏原，柴田，馬場の発表であった．柏原の研究は，脳波と知能テスト問題のタイプとの関係を見たものであったが，1 人の被験者についての 1 回の実験であったために，現象が疲労と独立でない点が，馬場より指摘された．また八重沢（筑波大）より，問題のタイプによる効果ではなく，Activation の効果が出ているのではないか，また周波数と発生部位を関係づけることについて疑問が提出された．発表者から，

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

課題によって覚醒水準に差があるとはいえるという回答があった.

柴田の発表は電気回路の問題について「思考過程の図示分析」を行ったものであった. ガルペリンの理論に十分沿っていない(城), 思考に省略の生ずるのは当然である(河崎・馬場)等の指摘があったが, 方法そのものについては興味が持たれた.

馬場の研究に対しては, 学力テストの成績判定が1人の評定者によっている点, 理解「過程」の研究にしてはstaticな方法であるとの批判があった(城), 報告者からは, 短期間の理解過程の研究には, このような方法はまちがっていないし, あってもよい. この場合1人の評定者によることは止むを得なかったと返答された.

この他の研究についても思考研究法と関係のないものは当然ない訳であるが, 特に思考の問題の研究は, その思考内容の質と行動・表現の関係が定かではなく, 研究法の問題が常に重要な問題として潜んでいたと思われる. この点について青木のОбчуеНИеの発達の研究法について質問があったが(城), 発声, 発語, 微少反応で研究したということであった. 加藤の発表に対しては, 他人との情動的Communicationを欲するためと考えられる部分もあるという意見が辻野より述べられた. 加藤は, その通りであるが, そのcommunicationの中で思考訓練が行われていると観るべきだと答えられた. 城の研究に対しては, 森(職業訓練大学校)より総合行為などについて質問があり, プログラム内容, 総合行為の意味について説明がなされた. しかし, 上記の討論では, 用語や説明の共通理解が十分でなく, 討議は多くの問題を残しているように思われた.

河崎・辻野の研究に対しては, まとめて質疑が行われた, いずれも幼児の象徴機能に関するものであった. 河崎に対しては, 保育園間に違いがあるかどうか辻野より質問があり, これに対して違いは調べていないということであった. このため, 園児同志のあそびの伝えあいの可能性が問題として残された. また, 辻野に対しては, 河崎より, あそびの「中」「外」を分けているが, 行為動作と言語的質問に分けた方がよいという指摘がなされた. 辻野は, 質問状況と行為状況に分けることに同意したが, あそびが子どもの象徴機能に影響するという観点は重視したいという意見であった. 河崎, 辻野両者に対して, 横山(和光大)より, みたて行為(象徴機能)を単に1つのみたて行為と分類するのでなく, より具体的にどのようなみたて行為であったか, 細かく分析・記録すべきであると意見が述べられた.

以上の質疑・討論は, いずれも方法的なものに重点があったが, これらの問題の背後には, 意識や思考などの内的過程を知る難しさの問題があるように思われた. 箱田(九大)より,「ある想像的行為を行う際, 年少幼児では事象を支えもし, 年長幼児ではその支えなしに行う, という仮説は, 具体的にどういった実験によって証明されるかという質問が, 河崎に対して提出されていた. これに対する回答はなされる時間的余裕がなかったが, 一般的にも方法論的に重要な問題を提出しているように思われる. 端的にいって, 研究が主観を客観化する方法を要求するとすれば, それはどのようにして行われるのであるか. 今回の諸発表も, そのいくつかの試みを提出しているという意味で興味深いが, いずれの研究もこの点に問題を残している. 勿論, この問題は, 心理学にとって永遠の問題であろうから, 完全を期すことは現在のところ不可能であろうが, 最善を行う努力は更に要求されているように思われる.

なお, いかに思考の発達が行われるかについては, ほとんど討論が行われなかった. このことは, 思考の研究が, 更に明確, かつ厳密な方法で, 通時的に行われなければならないことを示唆するものであろう.

付記　座長は, 質問のほか, それに対する回答をも用紙による要旨提出を求めた. この結果, 両者合わせた用紙枚数は, 20達に達した. 今回の討論報告は, これらに基づいたものである.

(馬場道夫)

発　　達(249〜256)

座長　山口勝己・那須光章

249 アニミズムに関する研究

三重大学　市川千秋

250 Multiple-cue Probability Learningにおける幼児の判断特性

京都大学　土居道栄

251 幼児の偶然概念について

NII-Electronic Library Service